

戦争文学の常套的な記述

この時代は、翼賛的な抑圧のもと、わずかに日野葦平の兵隊三部作や中島敦の佳作にみるものがあつた程度で、ほとんどは、翼賛体制に与する報国文学であつた。

文学史講義

戦争の語り方を考える

- ① 難解な表現へ
- ② 戦争体験の記述
- ③ 戦争賛美へ

翼賛体制の抑圧

日野葦平



小倉中学校(現福岡県立小倉高等学校)時代から文学に関心をもち活版屋に活動。第一高等学校入学後、軍医専攻を希望していたが、1926年(大正15年)、専修大学英文科に入学し、寺崎浩や田垣博一(前)と同人誌『新刊』(小説や詩を掲載していたが、1928年(昭和3年)、森谷で福岡青年の連盟に入会。前後は大学に専ら、東洋の沖中エの雑誌『赤井』を編んで、香島連海文学者の労働組合を創設するなどの活動に没頭したが、戦後になって、地方の同人雑誌『おん』にも参加して再び文学活動を開始する。1930年(昭和5年、8月に日野葦平の妻女で芸者の惣持こと日野日シ(良子)と結婚、9月には長男誕生。1934年(昭和9年)軍名を火野葦平に改める。

1937年(昭和12年)、日中戦争に応召し、出征前に書いた『義勇隊』の第6回芥川賞受賞を降中して知る。戦地で行われた投票日には日本から小林亮雄が参入した。その後、連隊に配属となり、軍医としての活動を果たし、戦時中の兵隊の生々しい人間性を描き、戦地から送った『義勇隊』(美と兵隊)が好評を博して人気作家となり、『陣中報』(兵隊作家)として知られた。『美と兵隊』は大きな好評を博し、『美と兵隊』(美と兵隊)とあわせて兵隊三部作は300万部を超えるベストセラーになった。太平洋戦争中も各戦場におもむき、従軍作家として活躍した。攻陥直後の南京に入り、それに至る進軍路において捕虜が全員殺害される様子を手紙に書いていく。

戦後は、『戦国作家』として戦争責任を顧みられ、1948年(昭和23年)から1950年(昭和25年)まで公職追放を受けるが、追放解除後も、軍医の「高田」(高田)と軍医の「橋本」(橋本)を舞台で描くなど活動し、九州初期の理想に生き方を築いた自伝的長編『花と鳥』(1954年)が自らの戦争責任に言及した『革命前後』(1957年)と並ぶ代表作として文学的分量を増し、戦時作家となった。

1960年(昭和35年)1月24日、自宅の書斎で死去。享年53。最初は心臓発作と書かれたが、死の前夜の行動などを不審に思った友人が妻を問うと、「HEALTH MEMO」というノートが交された。そこには「死にます、芥川賞のことは遠くからもしれないが、感心服した不安のため、すみません。お祈りしたい。さうなら、と書かれていたという。その結果、藤原典子と結婚した。このことには13歳差の間に遺腹の子が2人誕生し、2人とも公認され、生前に埋葬された。その時、ニュースで取った長男の映像がNHKの映像資料として現在も保管されている。この自叙は、60年安眠に向けて騒然としていた世情と関係があるともいわれている。

同年5月、『革命前後』および生前の業績により日本芸術院賞を受賞。

ルポとしての文学

五月十六日

.....私は死ぬ時には、敵にも味方にも聞えるような声で、大日本帝国万歳と叫ぼうと思つた。しかし、生きたい、生きられるだけは生きたい、とそう思うと、又も故国のことが思われて、胸がはいになり、涙が出そうになった。

眼を瞑(つぶ)つて祈る。砲弾は間断なく落下する。負傷者の唸(うな)り声(ごえ)がする。朝から何人にも食べないが、腹が減つたとは思わない。

少し眠ってみようと思ひ、自分の心を試験するつもりで、強いても考えないように努め、横になつたら少し眠れた。砲弾の音ですぐに眠が醒(さ)め、後はどうしても眠れない。

火野葦平伍長ついに徐州戦線の花と散る。かな。そんなことが不意と頭に浮かび、少しも可笑(おか)しくなく、慄然(りつぜん)とした。

早朝負傷した兵隊を抱き起した時に軍服について血が、眼に刺さるように、へんにきつく濃い色に映し。一瞬の後に死ぬのかも知れない。――七時。

歌も大ヒット

美と兵隊の歌謡

昭和13年

作詞 藤田まこと 作曲 大村能章

「徐州徐州と馬は進む 徐州屋(い)いよか住みよいか」

酒薄(しやれ)た文句に振り返りやお説教(なまり)のおけさ期

賢(ひげ)が微笑(ほほえ)む奥畑

2 戦友(とも)を背にして進む歩を 往けば戦野は夜の中

「すまぬすまぬ」を背中に聞けば「馬鹿を言うな」とまた進む

兵の夢みの頼もしさ

3 胸をたいては遠かな空を 仰ぐ雲が飛ぶ

遠く祖国を離れて しみじみ知った祖国愛

戦友(とも)よ来て見よあの雲を

- 4 眼(まなこ)ひらけば砲煙(たけ)の火(ほ)の狂(くる)う中
- 夕陽(ゆづり)から身に浴びて 独り平和の色染める
- 妻の静けさ(た)くま)しき
- 5 往(ゆ)けど進(ま)ると妻(つま)の 波(なみ)の深(ふか)さよ夜(よ)の寒(さ)さ
- 声を殺して黙々と影を落として 雲々(しゆくしゆく)と
- 兵は徐州へ前線へ

メディア論の必要性

メディア=何かを運ぶ媒介
何=情報

声 文字 手紙 張り紙 本 雑誌 新聞 ラジオ 映画 テレビ ネット

右に行くほどマス(大きな)メディア

メディアが送り出す情報は、現実そのものではなく、送り手の観点からとらえられたものの見方のひとつにすぎない。事実を切り取るためにはつねに主観が必要であり、また、何かを伝えるということは、裏返せば何かを伝えたいということでもある。メディアが伝える情報は、取捨選択の連続によって現実を再構成した的的なものであり、特別な意図がなくとも、制作者の思惑や価値判断が入り込ませざるを得ない

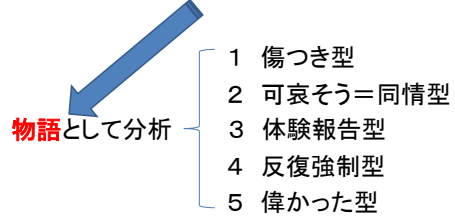
菅谷明子「メディア・リテラシー」による

メディア論の可能性

- 声 ←一回性・再現性→文字 手紙
- 文字 手紙 ←単独性・複数性→ 雑誌 新聞
- 雑誌 新聞 ←創作性・確実性→ ラジオテレビ
- ラジオ テレビ ←単方性・両方性→ ネット

戦争の語り方

事後的に戦争を語る主な方法



傷つき型

- 1928年、師範学校を卒業したばかりの大石久子別荘「おご先生川」は、島の岬の分教場に赴任する。そこに入学した12人(男子5人、女子7人)の児童は、すぐに大石先生になつき、子供たちのあいだでは先生は人気者になる。しかし自衛隊に乗り浮腫で毎日教壇をおこなう先生は「ハカウラ」であるを理由に、当初は村の人達から敬遠され、嫌われもした。面と向かって悪口を言われたことすらあった。
- そんな折、大石先生は年度途中で子供たちの作った落とし穴に落ちてアキレス腱を断裂。分教場への通勤が不可能になり、町の本校へ転任が決まった。大石先生が不在の中、「おご先生」を慕う子供たちの必死の働きかけもあり、大石先生が子供たちにとってかけがえのない存在であることを村の人達も知ることとなった。
- 1932年、子どもたちは5年生になり、本校に通うようになり、大石先生と再会する。しかし、児童のなかには卒業の準備で学校に行けなくなる子どももあらわれる。また、小学校卒業後の進路もさまざまである。1934年春、彼らの卒業とともに、大石先生は結婚して退職する。
- 長い戦争が終わった1946年、夫も戦争でなくした大石先生はふたたび教壇に復帰する。教師の道をえらび、母校に勤務しているかつての教え子の呼びかけで、12人(のうち消息のわかるものは大石先生と食会をもつ。しかし、男子5人のうち3人は戦死、1人は戦場で負傷し失明して、女子7人のなかで1人は病死、もう1人は消息不明のままである。時代の傷をかれらは背負っていたのである。



詩だとこんな感じ

「死んだ男」 鮎川信夫

たとえば霧や
あらゆる階段の足音のなから
遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。
——これがすべての始まりである。

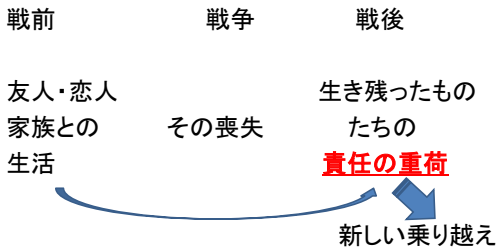
遠い昨日.....
ぼくらは暗い清濁の椅子のうえで、
仰がんだ顔をもてあましたり
手紙の封筒を裏返すようなことがあった。
「実際は、影も、形もない？」
——死にそこなつてみれば、たしかにそのとおりで
あった。

Mよ、昨日のひややかな青空が
剣刃の刃いつまでも濡っているね。
だがぼくは、何時何処で
きみを見失ったのか忘れてしまったよ。
短かかった黄金時代——
活字の置き換えや神様ごっこ——
「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて.....

いつも季節は秋だった。昨日も今日も、
「淋しき中に落葉がふるる」
その声は人影へ、そして街へ、
黒い鉛の道を歩みつつけてきたのだった。

埋葬の日は、言葉もなく
立ち会う者もなかった
憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。
空にむかって眼をあげ
きみはただ重たい影のなかに足をつこんで
静かに横たわったのだ。
「さながら、大塚も海も還るに足りない」
Mよ、地下に眠るMよ、
きみの胸の傷口は今でもまだ痛むわ。

傷つき型の図式



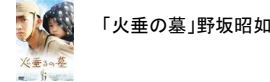
可哀そう=同情型

1945年9月21日、清太は省線三ノ宮駅構内で衰弱死した。清太の所持品は錆びたドロップ缶。その中には節子の小さな傘片が入っていた。職員がドロップ缶を見つけ、無差別に耳むら取り投げる。地面に落ちた缶からこぼれ落ちた遺骨のまわりに重がひしきり飛び交い、やがて静まる。

太平洋戦争末期、兵庫県御影町(現在の神戸市東灘区)に住んでいた4歳の節子とその兄である14歳の清太は6月5日の空襲で母も家も失い、父の従兄弟の末っ子である西宮市の親戚の家に身を寄せることになる。

やがて血の繋がりのない節子と清太を、叔母は邪険に扱うようになる。二人の兄妹は家を出ることを決心し、近くの池(2)のほとりにある防空壕(3)の中で暮らし始めるが、配給は途切れがちになり、情報や近所付き合いもないために思うように食料が得られず、節子は徐々に栄養失調で弱っていく。清太は、畑から野菜を盗んだり、空襲で無人の人家から物を盗んだりしながら生き延びる。やがて日本が降伏し戦争は終わった。敗戦を知った清太は、父の所属する連合艦隊も壊滅したと聞かされショックを受ける。

節子の状態はさらに悪化し、清太は銀行から貯金を下ろして食料の調達に走るが既に手遅れで、幼い妹は終戦の7日後に短い生涯を閉じた。節子を家畜に付した後、清太は防空壕を後にして去っていくが、彼もまた栄養失調に冒されており、身寄りもなく駅に寝起きする戦災孤児の一人として逝去した。



「火垂の墓」野坂昭如

同情型の図式

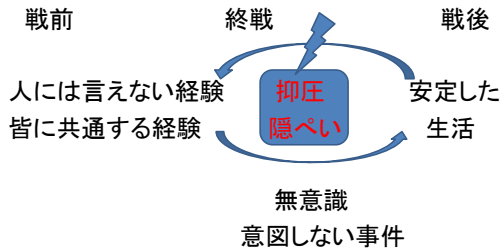
- キャラ設定
 - 子供・女が多い
- 被害者性の強調
 - 加害者＝大人(軍人)・外国人(敵国)
- 責任の不明確
 - 時代？ 人？

戦前脅迫反復型

前任地での仕事の引継ぎに行き来るといったまま新婚一週間で失踪した夫、鶴原憲一のゆくえを求めて北陸の灰色の空の下を尋ね歩く禎子。ようやく手がかりを掴んだ時、“自殺”として処理されていた夫の姓は曾根であった！ 夫の陰の生活がわかるにつれ関係者がつぎつぎに殺されてゆく。戦争直後の混乱が尾を引いて生じた悲劇を描いて、名作『点と線』と並び称される著者の代表作。



強制反復型の図式



日本人偉かった型



時は1945年7月、日本軍はポツダム(現在のミンマー)で連合軍の猛反撃に遭い戦局は異常に悪化していた。
 日本軍のある兵隊は音楽学校出身で、ゆるい小隊の隊長に任命されていた。そのため、隊長は彼らによって隊の規律と型を保持していたのであった。中でも水島はまず「ためた事案に集中し、緊急の演習を頻りにして部隊を訓練して来た。また水島はポツダム人の精神を待たずに、早急な整理で隊にこなしていた。
 戦後で小隊は解散され、おひの地を離れて帰る。しかし戦時中は三島で訓練を続けており、このときで全滅する終戦、戦争で「大規模な攻撃」を受けて水島は戦場に打ち、兵隊仲間と交戦。その後、大規模な攻撃を受けた時に戦いに巻き込まれた。水島はよく似た青年は戦場が現れる。水島はその場を呼び止めたが彼は一言も返さず、逃げるように歩み去った。
 そのような事から水島は、自らとその事柄を考慮する。新しい物事の始まりからオウム多量に逃げ、ゲーム、ミニゲーム、コンピュータゲームなど日本各地へ行って、戦時中、戦後で生きていく。このようにして戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をするが、戦後で戦時中から戦後の生活を送る経験をするが、戦後で戦時中から戦後の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 小隊が自衛隊に日本へ帰還する「たが」が来た。隊長は昔の経験が水島ではないかという思いを抱いて、彼を引き連れて帰ろうとした。隊長は、日本を去るまでオウム多量に逃げ、戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 出陣前、青年軍が隊の前に送られた。収容所の横で三島隊長は水島を会合する。ついに青年軍はこらえ切れなくなったように経験を会合に含めなくてかき鳴らす。水島は水島と戦時中から戦後の生活を送ってきた。戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 戦時中、戦時中の三島隊長は水島と戦時中から戦後の生活を送ってきた。戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 戦時中、戦時中の三島隊長は水島と戦時中から戦後の生活を送ってきた。戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 しかし、強い雨が降ってきたところで水島は戦時中から戦後の生活を送ってきた。戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 その時、水島は戦時中から戦後の生活を送ってきた。戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 水島は戦時中から戦後の生活を送ってきた。戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 水島は戦時中から戦後の生活を送ってきた。戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。
 水島は戦時中から戦後の生活を送ってきた。戦時中から戦後の生活を送ってきた。水島は戦時中の生活を送る経験をする。水島は戦時中の生活を送る経験をする。

問題点を整理してみよう

- ① 自分たちの被害者性のみを強調
- ② 自分たちの加害者的側面にふれない
自虐史観問題を再考した方がいい
- ③ 反動としての戦前賛美という問題
私たちは何かを昔に置いてきた？

事実と真実



A君がB君をパシリにして他の人々は無視した。そして、B君は自殺した

つまり...

事実の一つでも.....
その背景の真実は、沢山ある。

事実は証拠によって確定できる。
1945年8月アメリカが日本に原爆投下
真実は語り次ぐ人々によって決まる！
広島原爆ドーム、原爆資料館
アメリカの戦争資料館

自虐史観

自分たちの歴史を否定的に語る歴史観

悪い戦争を起こした日本は、中国や朝鮮に
さんざん悪事を働いて来たが、結局正義の
連合軍に負けた。

戦後は、それを反省して立派な国になった。



~~自虐史観~~

誇りある歴史観

自分たちの加害者性という問題

- ① 転向という問題
プロレタリア → 翼賛 → 民主主義
(左翼) (右翼) (保守)
- ② 責任という問題
責任を問う主体
責任を問われる対象
責任の内実

日本に多い戦争の語り

- ① 庶民はわけのわからないうちに時代へ巻き込まれている
- ② 庶民は、自分たちの故郷・家族を守るために戦っていた
- ③ 庶民でもとくに弱い、子供と女は犠牲だ
- ④ 戦争は悲惨だから繰り返すまじ
- ⑤ 敵は外部にいる

可能性

『夕凧の街 桜の国』(ゆうなぎのまち さくらのくに)はこうの史代作の広島原爆投下後を描いた漫画で、双葉社より発刊。また、2007年(平成19年)に映画化され、そのノベライズも出版された。映画の公開は2007年7月28日(土曜日)。原爆が投下された広島県では、2007年7月21日(土曜日)から先行公開された。



『夕凧の街 桜の国』

- ①、原爆を被害者性で描かない
- ②、原爆が呼び込む内なる差別を問題に
- ③、その悲しみが世代で乗り越えられる(ない)
- ④、悲しみの克服に費やされる時間.....